

第52回NSRI都市・環境フォーラム
(no.292)

『東京スカイツリーとすみだの観光まちづくり』



高野 祐次 氏
墨田区 産業観光部長

日時 2012年4月19日(木)
場所 NSRIホール

目次

1 東京スカイツリーの誕生と「下町文化の創成」

- (1) 東京スカイツリーの概要
- (2) 観光振興の起爆剤・東京スカイツリーの誘致、そして建設・完成
- (3) スカイツリーによる地域活性化効果
- (4) スカイツリーの街の受け皿づくり

2 すみだの観光まちづくり～江戸から今に至る歴史と文化を活かす～

- (1) すみだの街と歴史文化
- (2) すみだならではの観光スタイル
- (3) スカイツリーと街の界隈性を活かして
- (4) 観光推進の課題
- (5) すみだ型の観光事業展開
- (6) 大都市東京のなかの魅力ある観光都市を目指して

◆高野 祐次(たかの・ゆうじ)氏

墨田区 産業観光部長

1958年(昭和33年)東京都生まれ。上智大学経済学部卒業後、1982年(昭和57年)墨田区役所入所。商工部産業経済課に配属、2003年(平成15年)産業経済課長、2006年(平成18年)新タワー観光推進課長、2010年(平成22年)財政担当課長、2011年(平成23年)新タワー調整担当部長などを経て4月から現職。趣味は、墨田の郷土史、文化の研究。

(著書等)

「中小企業振興条例で地域をつくるー地域内再投資力と自治体政策ー」(自治体研究社/共著、2010年)

谷 大変長らくお待たせいたしました。ただいまから第52回NSRI都市・環境フォーラムを開催させていただきます。

本日は、お忙しいところ、また大勢の方にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

本日のご案内役は、私、日建設計広報室の谷礼子でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日のフォーラムは、ご案内のとおり、墨田区産業観光部長でいらっしゃる高野祐次先生にお話をいただきます。

本日は、『東京スカイツリーとすみだの観光まちづくり』と題してご講演をいただきます。高野先生は、1982年に墨田区役所に入所され、その後、産業経済課長、新タワー調整担当部長などを経て、今年4月から現職についていらっしゃいます。

東京スカイツリーは5月22日のグランドオープンを前に、今や毎日のようにスカイツリーの話でいっぱいでございます。高野先生は、計画当初から行政のお立場で参画しておられます。私どもも設計監理を担当させていただき、大変光栄に存じますとともに、先生には日ごろから大変お世話になっております。

墨田区は歴史的な文化が残る街ですけれども、新タワーが加わった新しいまちづくりについて、今日は貴重なお話を伺えるものと大変楽しみにしております。

それでは、早速、先生にご講演をいただきたいと存じます。どうぞ皆様、大きな拍手で先生をお迎えください。(拍手)

よろしく願いいたします。

高野 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました墨田区の高野と申します。約2時間ほどですけれども、おつき合いを願いたいと思います。よろしくお願いいたします。

我々にとりまして、こういうお話を90人の皆さんの場でできるということは大変幸せで、我々は、行政マンというよりは観光とか産業の営業マンですので、今日はたっぷり営業活動をさせていただきたいと考えております。

今日のお話は大きく2点です。東京スカイツリーが5月22日に開業します。今日は19日ですから、今月の25日で7年半前になりますが、7年半前の11月25日に墨田区

長が区議会本会議の場で、新タワーの誘致を表明しました。それから、5月22日の開業に至るまで、あっという間の月日だったのではないかと私は思っております。

そういう意味で、前半は、東京スカイツリーの誘致、完成までの流れと、それにかかわる行政のさまざまな施策の取り組みをあわせてお話をさせていただきます。後半は、何故ここに建ったのかという必然性と関連して、江戸以来の伝統文化、歴史が残る街、それを生かして観光をしっかりとやりなさいというメッセージがありますので、今どういう取り組みをしているのかというお話をしたいと思います。

(図1)

まず最初に、誘致が決まった後、私は、この押上・業平橋地区のまちづくり、グランドデザイン策定にかかわりました。その際に、専門委員のお1人に江戸東京博物館の竹内誠先生がいらっしゃいました。

(図2)

竹内先生にお願いに行ったところ、この絵のことを教えていただいたんです。これは、鋏形恵齋が1809年に描いた「江戸一目図屏風」というものです。両国橋、吾妻橋、永代橋がかかっています。隅田川があつて、江戸城があります。この絵はまさに押上のあたりの600メートルぐらいから見た絵ではないかというのが竹内先生の説でした。私はそれ以来この話をしてしています。これが誘致決定のときのエピソードです。200年以上も前にこういう絵があつたということです。

(図2)

両国橋の真正面に回向院があります。一の橋、二の橋という堅川に架かる橋があります。そして、ここに百本杭というのがあります。JRの鉄橋ができるまであつた隅田川の波消しのための杭です。

(図3)

スカイツリーに上って、350メートルのエレベーターをおりると真正面にこの絵がありますので上ったらぜひ見ていただければと思います。

それでは最初に、スカイツリーの紹介として、比較的新しいDVDをスカイツリー社からお借りして、今日持ってまいりましたので、それを映します。

(動画上映)

1. 東京スカイツリーの誕生と「下町文化の創成」

今日皆様のお手元にお配りしてある資料をご紹介します。「すみだものづくり探訪」、3M (Museum、Meister、Manufacturing Shop) マップと呼んでおります。墨田区の地図を兼ねておりますので、後ほどご紹介いたします。スカイツリー社からいただいておりますリーフレットがあります。「東京スカイツリー2012年春開業」。「すみだ観光まる得ブック」、これはフリーペーパーです。先週でき上がりました。観光協会と区が共同で作成したものです。最後が「すみだ地域ブランド戦略」のパンフレットです。この4点です。

(図4)

それでは、何故スカイツリーの誘致をしたのかという話からしたいと思います。墨田区はもともと、中小零細企業の製造業が集積した街です。これは歴史的にそういうことで発展してきた街です。ご案内のように、1970年、今から40年前は9700あった工場が2000年には4800、そして2008年には3400、40年で3分の1になっている。ここ10年でも3分の2ぐらいに減っているという状況があります。ものづくり機能の海外移転が背景にあります。住宅化が進展して、ものづくりを取り巻く環境がかなり変化してきている。ものづくりの衰退が著しいということです。

そこで、私どもの山崎区長が考えた結果、これからの墨田の施策からものづくりを捨てるわけにはいかないの、ものづくりの再生をしていくために、観光というテーマが出てまいりました。

ここに書いてあるとおり、国も小泉政権あたりから、ビジット・ジャパン施策を提唱したり、東京都もそういった施策を打ち出してきた。それに合わせたように、墨田区も平成16年に観光というテーマで振興プランを策定したのが、ちょうどタワーの誘致の時期に重なったということです。

(図5)

山崎区長が誘致の表明をするわけですが、その時期は、2003年(平成15年)に放送事業者の在京6社が新タワー推進プロジェクトを発足してから1年後の平成16年12月です。この時は、「まさか、墨田区が手を挙げたって、話にならないよ」というのが大方の意見だったそうです。

先月、新タワー候補地に関する有識者検討委員会の先生方と放送事業者の方々、東武鉄

道、スカイツリー社、我々で、タワーの開業直前の総括的な会議をしました。そこで当時のことを振り返って、学識経験者の先生方が言っていたのは、「15手が挙がっていたので、まさか墨田になるとは思わなかった」「今さら何を言っているんだ。かわいそうだから、入れておいてやろうか」という感じで最後の15番目に入ったというのが実際だそうです。放送事業者の方も「まさかと思っていた」と言っておりました。

今はどうなのかというと、「墨田でよかった」と皆さん一様に口をそろえて言っております。1つは、住民の方の反対もなく、皆さんの総意で受け入れていただいているということがあります。放送事業者の方は、「我々だけで決めるのはなかなか難しかった。いろいろな熾烈な戦いがあったので、第三者の学識経験者の先生方の委員会組織があつてよかった」という話もしておりました。

(図6)

そんなことがあつて、2005年3月に15の候補の中から6つに絞り込まれ、さらに墨田・台東エリアが第一候補になりました。ただ、この時は最終決定ではありません。3つの条件がつけました。墨田・台東が連携してやるという話が1点。住民の反対があつたら進まないというのが2点目。防災の取り組みをしっかりとやるというのが3点目。

こうした条件を踏まえて、墨田区と台東区では、2005年7月、墨田・台東新タワー誘致推進連絡会を結成しました。そして、誘致の最終実現に向けてさまざまな取り組み、例えばシンポジウムや意見交換をやり、何とかしてここへ持ってこようという動きをしたわけでございます。そして、平成18年3月末に最終決定がされました。

(図7)

それには何が決め手になったのか。検討委員会の最終報告のポイントの抜き書きをしております。この地区はこれだけ東京が変わっている中で唯一残された江戸伝統文化の継承地である。日本の歴史遺産を国内外にお示しできる地域ということです。このタワーがきっかけになって、新しい江戸文化、日本文化が再発見できるような観光拠点になっていくことが、これからの東京には非常に意味があるという評価をしております。こういうことを言われて、これからのまちづくりの方向性も見えてくるわけです。

最終決定の選定理由として幾つかあります。タワーを中心としたまちづくりが進められる好機にある。新しい情報発信の都市文化の創成拠点となる可能性がある。歴史・伝統を有する数々の資産がある。隅田川や周辺の観光資源に恵まれている。こういったものを有

機的につなぐ拠点となる可能性がある。つまり、隅田川を挟んでさまざまな観光資産があるので、そういったものを有機的につないでここが拠点になる、そういう可能性があるという評価をいただいて選定をされたわけです。

特に、先生方からは、東京の都心に近いこの地に隅田川はあるし、内河川もきれいに残っている、水辺が残っているということに対する評価が高く、これを何とか活用しなさいという助言をいただいております。

(図8)

平成20年7月に建設の工事が着工しました。その前に東京スカイツリーという名称が決まっております。この頃はメディアに出ても余り話題になりませんでした。話題になり始めたのは、平成22年2月の300メートルを超えたあたりです。333メートルを超えたのが3月28日、年度末でした。押上・業平橋地区は浅草から歩いて14～15分のところ。土曜、日曜は人も来ない静かな街でした。この頃から土曜、日曜には、タワーの建設地の周りを見物客でいっぱいになりました。これは未だに続いております。それが平成22年3月の終わりで、1年後の平成23年3月には634メートルに達します。

ただし、この3月18日の1週間前に東日本大震災がありました。634メートルにもう少しというところで、東京に震度5強の揺れが襲いました。地震の時には、ゲイン塔と呼んでいるアンテナの先端にある制振装置が働いて、揺れを抑える機能があります。もちろん、構造そのものが心柱という五重の塔の日本の伝統的な建築技術を活用しております。ところが、この時には、634メートルを完成していないので、その制振装置は働いていませんでした。ユーチューブなどで大きく揺れる映像が出ておりますが、結果的には、本体には何の影響もなかった。この時の様子はNHKはドキュメンタリー番組で流れました。そういう意味では、日建設計の設計も含めて技術の粋が集められた塔だと思います。

ただし、去年の12月が竣工予定でしたが、2月末に2カ月ずれ込みました。開業が5月22日。これは1カ月ちょっと遅れた程度だと聞いております。2カ月の遅れの分、1カ月ちょっとに切り詰めて開業にたどり着くという状況です。

最近テレビでスカイツリーからのお天気カメラをご覧になることがあると思います。375メートルにカメラが設置されておりますが、1社だけはそれより低いところに設置されております。先ほどのDVDの映像でご覧になったと思いますが、花火が映っていましたね。あの花火は斜め下に映っていました。花火は200メートルまでも飛ばないので、

350メートルからだと下を見おろすことになります。そこでテレビ東京は隅田川花火用に375メートルのところより下に置いているという話も聞いております。

(図9)

5月22日のオープンを前に、一昨日450メートルの展望台がマスコミ公開されました。発表されている資料をもとに主な施設を紹介します。

第1展望台の350メートルは「天望デッキ」、第2展望台のここは「天望回廊」、間に行くエレベーターが「天望シャトル」という名前になっています。そういうネーミングと合せて、いろんなところに趣向が凝らされておりまして。例えば第1展望台の天望デッキは3層になっていて、一番下の層の床はガラス張りになっている場所があって下が見えるようになっています。天望シャトル、4基のエレベーターのエレベーターごとに、桜、隅田川、祭り、都鳥の空という4つのテーマでアートパネルが、中に飾ってあります。これは墨田区の若手デザイナー、高橋正実さんという方のデザインです。この方には我々も、3月から走り出した区内循環バスのデザインをお願いしました。こういうところに区内の若手の産業人の知恵が生かされているのは、我々もとてもうれしいことです。

(図10)

展示演出を幾つかご紹介します。開業に向けてライティングの試験が行われています。LEDが、全部で1995台あります。今夜、フル装備で試験を行いますのでご覧ください。今まで、クリスマスやお正月にライトアップをしましたが、白いライトで300台ぐらいしか使っていません。だから、今日の点灯はとても見ごたえがあるのではないかなと思います。

展望台の周りに、白い光がクルリクルリと回ります。1周を1秒で回るので、我々は時計光と呼んでいます。雨の日や曇で覆われた時の対応としては、雲のじゅうたんに向かってライトアップをするときいています。アメリカのエンパイアステートビルディングでもそういう仕掛けがあるらしいですが、下から見える景色を楽しんだり、展望台の上から見る景色を楽しんだりという趣向が凝らしてあるそうです。さまざまな知恵と工夫を凝らしながら進めているところです。

(図 11)



スカイツリーができることによる効果は何だろうかと考えてみる可能性があります。まず1つは、東京の開発は、南のお台場、西の六本木から品川が中心になっています。それがここに1つの大きな核ができることで、東京の都市軸が東に移ってくる。皆さん方の心理

的にも、人の流れ、イメージも東に軸が移ってきて、それによって、何かにつけ東のほうに目が向くだろうと思っております。

そういうことを踏まえて、地域活性化効果とは何ですかという話になるわけです。1つは、観光スポットになりますので、集客効果があります。2500万人の来街者を東武鉄道で見込んでいます。2週間ぐらい前には3200万人という数字が新聞に出ていました。当初2500万人で墨田区も見込んでおります。地域への経済波及効果、880億円。これは4年ほど前に博報堂に調査を依頼して出してもらったものです。

あとは、当初のねらいです。ものづくりと観光の融合ということで、地域のブランディング、下町文化の創成、こういったことが実現できる可能性があります。それと、先ほど申し上げた水辺の再生です。防災機能拠点の形成というのは、言うまでもないことです。

(図 12)

そういう効果を生むためには、行政として、開業に合わせてさまざまな施策を整えておかないといけないということで、平成18年の誘致が決定してから受け皿づくりを始めています。

最初に、先程申し上げましたように、押上・業平橋地区のまちづくりのグランドデザインを策定しました。これはタワーの開発によって直接影響が出る区域が周辺にあります。

この区域を35ヘクタール特定し、まちづくりの大きな方向性を出しました。

(図13)

このランドデザインでは都市計画マスタープラン上の都市機能を「広域総合拠点」という位置づけで提案しております。押上のこのあたりは、タワーの南側に北十間川が流れております。北十間川の整備や道路の整備などをこの中で提案しています。

(図14)

広域総合拠点をハードの基本計画である都市計画マスタープランの見直しで位置づけ、合わせて個別事業の計画を精査しました。北十間川の水辺の活用構想や、16年につくった観光振興プランの改定をいたしました。こういった具体的な個別の計画を基本計画という区の最上位の行政計画の中に位置づけをしました。基本計画の本体は、既にできていましたので、新タワー事業編というのを分冊でつくりました。都市計画マスタープランの見直しに合わせた都市機能を新たに盛り込んで、個別具体の事業を位置づけたというのが新しい基本計画の新タワー事業編です。これらを平成18年度から19年度にかけて精力的に行いました。

ただし、計画を事業化するためには財源担保が必要です。そこで、社会資本整備総合交付金と呼ばれておりますまちづくり交付金の採択を受けるために、都市再整備計画をつくりました。新タワー関連で17事業、その他に3事業、計画をつくった上で国に認めてもらった。当初計画で92億円ぐらいの事業費の4割にまちづくり交付金が活用され、国費が入る仕組みをつくりました。ここまでがお膳立ての部分になります。

(図15)

そして、タワーの開業に向けてそれぞれの事業が動き出しました。それが今時点でご紹介いたします。この押上・業平橋地区のタワーの開発街区の南側を走っている北十間川の整備は



すべて完成しております。河川のお化粧直しをして、中央付近に人道橋をかけ、この辺はきれいになっております。タワーに向かって真っ直ぐに、タワーがきれいに見える通りがあり、タワービュー通りと呼んでおります。観光振興プランの中で提案したものです。このタワービュー通りについても、このあたりまで電線地中化、バリアフリー化が完成しております。桜橋通りもこのあたりまで完成しているということで順次進めているところです。

もう1つの目玉として、墨田区は葛飾北斎の資産を持っております。北斎美術館の計画があります。これもまちづくり交付金事業の中の1つになっていますが、東日本大震災があって、耐震構造の設計の見直しのため若干遅れているということです。

(図 16)

こうした整備工事がほぼ終わりました、現在の姿がこのような形になります。タワーの足元の北十間川の河川整備が終わっているところでございます。不思議なもので、こういうことが起こると、周りからお店も出そう、人も集まろうという動きがあります。

(図 17)

タワーの南側に、浅草通りという広い通りがあります。通り沿いには新しい店ができ、また開店準備中の店もあります。北十間川の南側に通りがあってこの道路もきれいに舗装が終わって、カフェができたりしていますが、主に若い人が進出しているのではないかと思います。

(図 18)

結構有名になりました「おしなりくん」です。押上・業平橋という地名ですので、前々から「おしなり」という呼び方をしていましたが、キャラクターまで生まれてしまいました。先週、この辺を歩いていたら、人がたまっているので、見てみると「おしなりくん」が出ていました。「おしなりくん」を取り囲んで写真を撮ったり、ワイワイやっていました。そんなにぎわいもできつつあるという昨今です。

(図 19)

「すみだ百景・すみまるくん・すみりんちゃん」という区内循環バスが、3月20日から3ルートの実行を開始しました。これが開業間際のタワーの周辺の状況です。

2. すみだの観光まちづくり～江戸から今に至る歴史と文化を活かす～

(図 20)

ここからが観光の話になるわけです。これはタワーの一番てっぺんのさらにてっぺんにあるゲイン塔の上に乗っている避雷針です。634メートルというのはここになります。高さ1メートル50ぐらいのものです。

(図 21)

5月22日にタワーの隣の東街区のビルの5階に、墨田区が「産業観光プラザすみだまち処」というのを開業します。この中に「すみだのてっぺん」のレプリカをつくってしまいました。子供たちが「すみだのてっぺん」にさわれる工夫をしております。

こういったアイデアは、小山薫堂さんという映画「おくりびと」の脚本家に全体のプロデュースをしていただいています。ああいう人たちはやはり突拍子もないことを考えるなと思いました。タワーの街区に来客数が2500万人という数字を申し上げました。タワーの塔本体に上る人だけでも年間540万～550万人おります。タワーは4階からエレベーターに乗って5階でおります。おりると渡り廊下があって、真っ直ぐ行ったところにこの「まち処」があります。手前の右側にはケーブルテレビのJ:COMのPR施設やセガの施設がありますので、人はここにかなり流れてくると思います。ここに来たお客様に墨田のものづくりをしっかりと見ていただく。街歩きをしていただくための街の魅力を紹介する。お茶を飲みながら墨田の銘菓を食べていただくお休み処を用意し、ものづくりの紹介をして、街歩きにいざなうためのコーナーを用意して、街へ出ていってもらおう、街に導こうというねらいがあります。

(図 22)

ここで墨田の街を簡単に紹介したいと思います。皆さん、この地図(3Mマップ)をご覧ください。これが現在の墨田区の地図です。中央部分から北側と南側は地図で見てもはっきりわかるように街

2 すみだの観光まちづくり～江戸に起源する歴史と文化を活かす～ (1) すみだの街と歴史文化

① 本所・向島の成り立ち

縄文時代までは海だったすみだの地域。入間川、荒川、利根川などの河川が運んでくる土砂が長い時間をかけて堆積し、島や洲をつくり、古墳時代には向島地域(北部地域)に基盤となる陸地が形成されていたとされている。



の構造が違います。北側を昔は向島と呼んでいましたが戦前は向島区という区がありました。南側は本所区という区でございました。墨田区は本所区と向島区が一緒になって昭和22年にできた区ですが、もともと成り立ちが違います。

向島と言われるところは、江戸の頃は江戸市中に野菜などの農作物を提供する農村でした。徳川将軍が隅田川の遊覧や鷹狩りで訪れた遊興の地でもあります。吉宗が1717年に桜の木をここに植えました。今も墨堤の桜という桜の名所としても有名でございます。

また、もとをただと在原業平がここに来て、「名にし負はばいざこと問はぬ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」と詠んだ地でもございます。その在原業平の後に梅若伝説というものもここで生まれております。謡曲「隅田川」の舞台です。そういうことがあって、この地というのは大変文学的な情緒を漂わせた伝説の地となったのではないかとされておりま

す。1804年に佐原鞠場という人が、今は向島百花園と呼んでいる新梅屋敷を開いて、大田南畝（蜀山人）や酒井抱月といった文化人を集めていろいろなことをやりました。隅田川の七福神などを生み出したのもその人たちです。文学的な情緒を漂わせた伝説の地がその後も続いて、明治になると、幸田露伴が住んで、森鷗外も幼少の頃この辺に住んだり、文人墨客が集まる場所になりました。

そういうところに、明治の終わり頃から工業化の波が進んでいきます。農村に工場がどんどん出てくる。当然工場労働者が住む住宅も増えてくるということで住宅化も進む。農村に工場や住宅が立ち並び、入り組んだ路地の町並みが生まれました。地図をご覧になると、明治44年頃の向島の地図では細かい農道のようなものがあります。それが今に至って、昭和のレトロな雰囲気のある長屋の路地空間となり、それもまた1つの魅力になっています。

そういうものを求めて若手の建築家、アーティストの卵が長屋に住みつきます。一軒家を使ってアート展をやったり、向島全体で10カ所、15カ所、20カ所が、同時にアート展をやったりするグループもこの辺に集まってきています。それも、先ほど申し上げたような文学情緒の漂う伝説の地になったのが今に生きているのかなと考えております。映画の舞台も結構あります。撮影所などもありました。

今、女将が1人お見えになっていますが、向島は東京の6花街の中で最大の花街があります。料亭街があります。今残っているのは16軒です。芸者さんも120人ぐらいいる

と思います。こんなに残っているのはここだけです。これがこれからの観光資源です。夜の世界は大事にしなければいけないですが、意外と昼の世界も活用できます。東京スカイツリーに上って向島で食事をして、芸者さんの踊りを少し見る。それが1つの商品になります。これが向島のエリアです。

(図 23)

それに対して江戸切絵図の本所をご覧ください。右側が今の地図。道路などの都市の骨格はほとんど変わりません。歴史は向島より新しいです。向島は在原業平ですから800年代です。本所は1657年が契機です。明暦3年に明暦の大火がありました。江戸じゅうが焼けて10万8000人が亡くなった。この時を境に、江戸幕府は両国橋をかけて隅田川の東側を開拓します。それ以降本所が開けてくる。1657年の明暦の大火以後の流れを言いますと、明暦の大火で亡くなった方を埋めて回向するため、両国橋を真っ正面に行ったところに回向院というお寺を建てて、そこで弔うわけです。1702年に赤穂事件の討ち入りがありました。討ち入りの舞台となった吉良邸の跡を区が公園として整備しております。隅田川の花火が始まったのは1733年。

(図 24)

回向院にたくさんの方がお参りに来て繁華街になる。見せ物小屋が出る。勸進相撲が行われる。1833年にはここで定場所が年2回行われるようになります。今に至る相撲の街の成り立ちです。

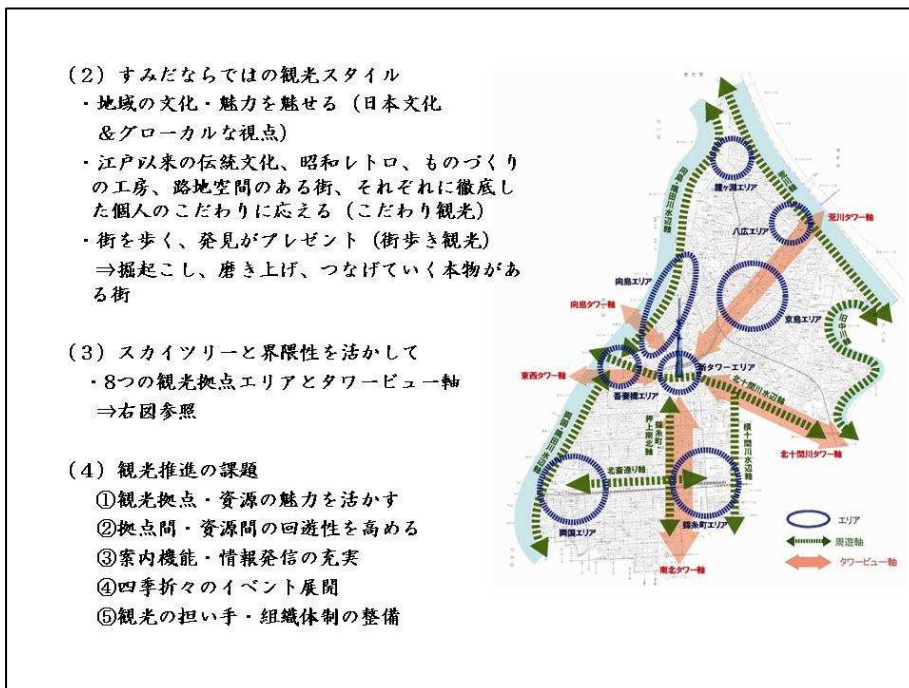
1760年に葛飾北斎が生まれて、生涯90年のほとんどをこのあたりで絵を描いて過ごしました。幕末の英雄、勝海舟が生まれて24歳までここに住んでいました。1717年の桜が植えられた翌年の1718年に生まれたのが「ももんじや」というイノシシ料理のお店です。江戸前握りずしの発祥や鬼平のモデルといわれる軍鶏鍋のかど家もここで生まれるなど江戸以来の食文化もあります。今、両国のあたりに江戸時代に生まれたお店が5～6軒あります。

大相撲と回向院の街、葛飾北斎、勝海舟を生み、芥川龍之介の成育の地が両国です。

江戸東京博物館ができたのは平成5年です。職人さんもたくさんおります。関東大震災、東京大空襲、度重なる災害の犠牲者を祀っているのが東京都の震災慰霊堂です。

これが両国を中心とした本所の話になります。

(図 25)



こうした江戸情緒の残る街をどういう形で観光してもらうか、というのがこれからのテーマになるわけです。我々がいつも言っているのは、街歩き観光です。飛騨高山や、北海道は、1つの場所から1つの場所まで離れていて車やバスで移動し

ます。地方はそうですが、東京の場合は、狭い街の中にいろいろなものが詰まっているのが特徴です。ですから、車なんか使わないで歩きましょう。歩いていろんなものを発見してもらおう。我々としてはそういうプレゼントをしたいというのが願いです。それが街歩き観光。

先ほど向島と本所をご紹介しましたが、こだわって深く突っ込んでしまうと抜け切れないようなところがあります。そういう個人のこだわりにもこたえられる観光にしていこうということです。

もう1つは、国際化の時代ですから、グローカルな視点が大事だと思っています。徹底的に墨田の江戸以来の文化にこだわった見せ方をすると、世界的にも通用するのではないかということです。そこで、観光振興プランでは、8つの観光拠点エリアとタワービューの軸を設定しました。回遊性の高い街にしていくためには、タワーに来ていただいたお客様に区内さまざまところを回っていただくということです。

それがこの図で、両国のエリア、錦糸町のエリア、吾妻橋、押上、京島、八広、鐘ヶ淵、向島です。エリアを8つに分けて、観光拠点としてそれぞれの拠点の特徴を生かした展開をしよう。それから移動軸を設定して、移動できるような回遊策を持っていこう。さらには、タワーが634メートルで区内いろいろなところから見えますので、タワービューという軸を活用しましょうというのがこの全体の考え方です。そういった考え方にとっ

てさまざまな施策、先ほどの道路整備なども、タワービュー通りという錦糸町からきれいにタワーが見える通りを整備中です。言問橋から見るタワーがきれいで、ここも整備をしていますし、桜橋通りも今やっているところです。これらのタワービューを活用しようというのが観光展開の考え方にあります。

墨田区が観光を意識して取り組み始めたのはタワーの誘致が決まってからです。今まで、隅田川花火はやっていました。国技館5000人の第九もやっていました。そういった全国に有名なイベントはやっていますが、観光という意識ではなかった。それがタワーを皮切りに始めたのですが、関東大震災、東京大空襲で燃えてしまって、いろいろなものが残ってない。だから、これをどうしようかということが今課題です。

イベントも浅草とは全然違います。四季折々の季節感のあるイベント展開が課題です。これらを担う、担い手が少ないのが課題です。この辺は浅草をお手本にして考えております。もちろん浅草になろうとは思っていません。墨田の良さは、これからの都市文化の象徴たる新しいスカイツリー、そして、その周りには昭和のレトロな街並みや江戸文化が残る街があります。つまり、コントラストが魅力です。そういうのをセットで見せていくのが墨田の観光だと思っています。

浅草の場合はご覧になってわかるように、正月から暮れまでイベントだらけです。それも浅草観光連盟がありますし、浅草の商店街連合会がありますし、おかみさん会もありますし、いろんな団体がそれぞれやるわけです。見ていると1年じゅうお祭りをやっているような街です。そこにお客さんが集まってお店にお金を使うからお祭りをやるにしても、お店からお金が集まりやすい。そういう街なので、我々は非常に勉強になります。

浅草には浅草寺を中心に歴史があります。商人の街です。墨田区の場合にはものづくりの職人の街です。親会社から仕事に来るのを待って、それを受けて仕事をする受け身の仕事をしていた。商人の場合にはお客様をつかまえて売るというのをやっていた。攻めのご商売をやっている。やはり、これが歴史の蓄積によって違ってきます。行政と街との関係もどうかというと、台東区の場合は、今申し上げた浅草観光連盟、おかみさん会、商店街連合会、いろいろな団体がスポンサーを連れてきてイベントを仕掛けてしまうわけです。1年間のスケジュールがほとんど決まっています。それを行政に持って行って、「俺たちがこれをやるから、公園を使わせてほしい」とか、「予算がこれだけ足りないから補助金を」ということです。墨田区の場合には、どちらかということ行政主導型ですので、行政が何か

を仕掛けて、予算立てをやって、街の人と始めていかないとなかなか動かないというのが現状です。この辺は、今申し上げた成り立ちの違いではないかなと思っています。ただ、それも、だんだんと担い手ができてくるのではないかなと思っています。

四季折々のイベント展開ということについても、浅草に学ぶのは、1年間のスケジュールはルーティンで回っています。それをやりながら、2年後、3年後を見据えて新しいものを考えている。今、浅草に平成中村座という歌舞伎の小屋が建っています。歌舞伎座を今改築中ですので、5年ぐらい前に改築の話が出てきたころからあそこは動いています。私が耳にしたのは3年以上前です。平成中村座をやる。そして中村座の前に船着き場をつくると言っていて、本当につくりました。行政の尻をたたいてやっているんです。船渡御というのを3月にやりました。あれも浅草の町会の若手たちが寺子屋という勉強会を長いことやっていました。その勉強会の中で、古い絵のなかに、浅草寺のお祭りの時に船でお神輿を隅田川を渡らせて、水神に奉納に行く絵が載っていた。その絵から勉強して船渡御を復活させました。それも3年前から始めていました。つまり、ルーティンで季節性豊かなイベントをどんどんやりながら、3年後にこれがあるぞ、タワーができるぞという先をにらみながら新しいものを仕掛けるというのが浅草のすごいところです。この点を学ばないといけないなと私は思っております。

(図 26)

これからは具体的な事業展開の話をしていきます。まず、1点目は担い手育成の話になります。けん引役として、3年前に観光協会を一般社団法人化しました。その時に、行政がこういった団体にかかわるのは天下り先をつくるのではないかな、自分たちの思いどおりにやる別組織をつくるのではないかなと思われがちなので、私がこれに観光課長でかかわっていましたが、民間人で動かせるような組織にしようと思いました。実際には、事務局長、事務局次長は区のOBで、我々とのパイプ役になっていますが、それ以外はほとんど民間人です。そして事業を進める4つの柱をつくりました。実質的に動く柱になる人を引っ張ってきてつくと動かないと思いましたが、役人が中心になってやると動かない。

最初に、街歩き事業と観光PRについてはJTBのOBの方が法人化の前からいましたので、じっくりやってもらっています。今日お配りした「まる得ブック」は、よくできていますので後ほどご覧ください。R社現役社員の出向と書いてあります。リクナビというサイトを持っているR社です。まだ30代の出向の社員がこれをつくりました。お店の

データは、バーコードがついていますが、バーコードで見えていただくとわかるように、リクナビと連携してデータをつくっています。そういった作り方から全然違います。まず最初の柱をこの2人で固めています。

次は旅行です。協会は第3種の旅行業を取っております。修学旅行はターゲットだと思っています。そして、一般の旅行。意外と視察旅行はねらい目だと思っています。商工会議所や経済団体が来たいと言っているのです。そういった旅行については、某東武系の旅行会社の現役の支店長に出向していただいて4年目に入っております。3点目は、商品開発、店舗展開です。先ほど「すみだまち処」のお話をしました。あそこで物を売るのは素人ではダメなので、観光協会に運営をお任せしていますが、専門家、某百貨店の現役の部長さんでしたが、55歳でやめていただいてこっちに来てもらいました。

4点目はIT活用です。IT関連については、スマートフォンのアプリを開発したり、観光ガイドブックの電子ブック化をしたり、そういったことをやれるような人間でNTT関連会社をやめた人に来てもらいました。その彼を招いたきっかけは、光タワープロジェクトです。光でスカイツリーを実現しようとしたプロジェクトのメンバーでした。そういうことに興味があるので、観光協会にリクルートしたということです。

これらの4つの柱で今事業を進めています。

観光協会だけでは担い手としては十分でないのです。それ以外にNPO法人が動いていたり、向島学会や、最近ではジャズをテーマにいろいろなお祭りをやろうという動きがあったり、やはりタワー効果ではないかなと思います。我々が黙っていても、やりたいという人たちが出てきて、しかも、行政の補助金頼りでは結果的に長続きしませんので、違う連携の仕方で動ける方々が増えてきているというのが最近の動向です。

(図 27)

事業展開の第2は、東京スカイツリーを活用した観光プロモーションです。先ほど旅行会社の出向で支店長が来ていると申し上げましたが、実際に全国に営業で回ってツアーをつくっております。今日はお手元にありませんが、北海道、秋田、庄内、小松、富山出発のツアーが盛り込まれた薄いパンフレットがあります。地元の街歩きツアーとANAと連携して商品をつくっています。ANAのツアーに参加すると何があるかという、「すみだ観光まる得ブック」がついてきます。ANAのツアーに参加した人はこれをもらえる。ANAは観光協会からこれを協会から原価で買い取ってもらう。ということをやっています。

何といても、タワーの5階に整備します「観光産業プラザすみだまち処」がシティプロモーションの拠点です。全国に営業に回っていこうというのがプロモーション活動です。

(図 28)

3番目は、街歩きです。1657年の明暦の大火、1658年に両国橋をかけ始めるとい歴史上の事実がありまして、それから350年後の2008年、「橋架け350ぶらり両国街かど展」というイベントを2カ月やりました。街歩き商品を16つ作りまして、2カ月間観光ガイドさんに徹底的に案内してもらったイベントです。仕掛けは、今も両国の街に60本立っている高札というものです。これがいろいろなところ、例えば吉良邸の跡の中には高札があって、説明があります。当時の切絵図などを使い古い町名を紹介した高札をかなり立てました。元町の跡、小泉町跡、町名、史実のあった場所。回向院も両国橋から真正面に正門がありましたが、正門跡、相撲部屋も10本ぐらい立っています。そういうものを立てて、見て回る街歩きをやる。

これをやるに当たっては「長崎さるく」を徹底的に研究し、両国の進め方はこれだと思えました。このイベントの成果は3点あります。まず、両国の街歩きのテーマが明確になりました。相撲、鬼平、北斎、勝海舟、テーマがたくさんあって、それを明確にしてルートをつくったというのが1つあります。歴史の掘り起こしですね。

2つ目は、ガイドをつけて街歩きをやるのはそんなに簡単ではないので、事前にPRをしないと行けません。申し込みを受け付けないといけません。お金のやりとりが入ります。当日待っていたら来なかったなんていうのがあります。歩いてみたけどおもしろくないと怒る人がいます。そういうトラブル対応があります。要するに運営ノウハウです。今後生かせる運営ノウハウをここでしっかりつけました。

3つ目は、この高札はほとんど道路、公園には立てておりません。行政の手続が大変だからです。それなら、街の人に頑張ってもらおうということで、マンションの植え込みや、普通の一軒家の窓の前など、9割は民地の中に立っています。街の人が立ててくれるというスタイルをつくりました。そうすることで、街の歴史を地元の人が再認識してくれました。そういうことに役立ったのが「ぶらり両国街かど展」の成果だと思っています。これを向島でもやりたいです。向島でやったら鐘ヶ淵にも展開したい。京島、八広でも1つのテーマでやりたい。そうやって全区的に展開して8つの拠点エリアに広げていこうという構想です。そのモデルがこの事業です。

(図 29)

ほかにこういったテーマは幾らでもあります。現在、観光協会では、例えば向島の料亭さん6軒と組んで、スカイツリー日付指定入場券引換券付きで、向島花街料亭でのランチを食べて、観光プラザで2000円のお買い物ができるというツアーを造成しています。それを1万2000円でやるということになっています。

それから、鬼平の舞台がいっぱいありますので、鬼平と歩く両国は何年も前からやっています。

ものづくり体験。職人工房巡りみたいなのもやっています。

こういうものに、観光協会がタワーのチケットとセットで商品をつくることになっています。観光協会が旅行業を取ったと申し上げましたが、スカイツリー社とJTBや近ツリなどの旅行会社は1日何枚という契約をしています。お客さんにスカイツリーをからめて街を歩いてもらえるわけです。これは非常にいい組み合わせではないかと思っています。

(図 30)

事業展開の4点目は観光回遊性の向上策です。区内循環バスを3月20日に走らせることになりました。「すみだ百景すみまるくん・すみりんちゃん」という名前です。これもネーミングに苦労したところです。結構利用が増えています。日曜日などは1日3000人ぐらい乗っています。台東区でいいますと「めぐりん」になります。文京区でいうと「Bーぐる」というのがあります。路線バスと違うのはバス停名称の工夫です。スカイツリーに来たお客様を乗せるのだったら、名前を考えようよということで、バス停の名前をいろいろつけています。例えば、春慶寺前、法恩寺入口、弥勒寺前。これを見て物語の世界が思い浮かんだ人は通です。鬼平犯科帳の舞台です。何とか3丁目じゃなくて、そういう名前にしています。

もう1つ、こういうことを始めてみると、地元の方の思いも伝わります。それをうまく引き出さないといけない。元徳稲荷神社入口の名前誕生のエピソードです。この神社は、墨田区の方も余り知らないのですが、南のほうにあります。古くから地元の人がお守りしていて、老舗の和菓子店が元徳餅というお菓子までつくっています。バス停の名前をつけるのに本当は迷っていましたが、地元の町会から「この名前をつけて、まち起こしをやりたい」という話がありました。それは大事にしようということでこの名前になりました。私も事前に見てまいりましたら、バス停の入り口から元徳稲荷まで250メートル以上あ

る道を、一直線に元徳稲荷というのぼり旗が地元町会の名前で何十本と立っていました。こうやって案内するよという話です。それは大事にして生かしていきたいなと思います。

(図 31)

5点目は舟運の話です。タワーの最終候補地に決まった理由の1つに、水辺があります。水辺の再生というのが課題として与えられています。墨田区には隅田川、荒川という1級河川に加えて内河川があります。タワーの前には北十間川、横十間川、堅川、小名木川、これは江東区です。従って、これは江東区との連携なくしては進まない。それと、隅田川の場合には台東区、江東区、中央区と連携しないとなかなか進まないといういい課題があります。

社会実験として実施している2つのモデル的な例をご紹介します。

隅田川舟運・街歩きのモデル例です。「東京新名所・舟で巡る東京スカイツリーと東京ゲートブリッジ～海と陸の巨大構造物めぐり」というテーマです。このあたりから舟で出て、隅田川と江戸の歴史の解説をしながらゲートブリッジまで行って、そこから吾妻橋に戻ります。そして、おりて、スカイツリーの周辺の街歩きをする。舟運というのは、舟だけでもいいのですが、街歩きを絡めるともっとおもしろくなります。

内河川の舟運の場合は、タワーの前から北十間川、横十間川を下ります。そうすると、ここに扇橋閘門というのがあります。内河川と外河川との間を水門で仕切って水位を一定にしております。水位が変わらず波もありません。水門には、樋門とってあかない門と閘門とって、間隔があいた2つ門が上下して船を入れる門があります。この閘門が観光的におもしろいです。扇橋閘門を渡って小名木川を越えて隅田川に出てもらおう。

ここは深川と言われる江東区ですけれども、ここでおりて深川街歩きをしながら江戸前握りずしを食べます。ミツカンがレシピを公開しておりまして、おすし屋さんがミツカンの講習を受けると、江戸前握りずしを握れるようになります。両国に1店、深川に2店あります。ここで江戸前の握りずしを食べながら、うんちくを垂れて、江戸の頃のすしはこうだったああだったという話になるわけです。小名木川の高橋の船着場から隅田川に出て両国のほうに抜けます。両国でおりて歩きながら、ちゃんこを食して終わりという1日コースで社会実験をやったことがありました。

今現在は区役所の前に15メートルの船着場がありますが、これを今年度から40メートル級に改修することになっています。それが終わったら、運航が始まるようなタイミン

グで進めていこうということです。そのために今、社会実験という形でやりながら、民間の事業者に参加してもらって、運航のための準備、トレーニングをしています。

(図 32)

6点目になりますが、インバウンドの話は避けられません。街歩き、舟運、インバウンド、この3点セットかなと思っています。インバウンドについては、国全体の動きもありますので、墨田区だけで何かやるというよりは、国と上手に連携し、今年の「訪日外国人旅行者の受入環境整備に係る戦略拠点」に選ばれました。今年度、戦略拠点は成田、押上・業平橋、名古屋、神戸、広島の5拠点です。戦略拠点に選ばれて、今年から2年か3年間続けてインバウンド対策のための事業を観光庁が直轄でやります。そういったことでインバウンドはしっかり取り組んでいかなければいけない課題です。

事業展開の7点目はフィルムコミッション。墨田を取り上げるものがどんどん出てきていますので、あとはいかにイメージをつくるかだと思っています。2年ほど前に「豆腐小僧」という墨田が舞台になった漫画が映画になりました。3・4年前に「のんちゃんのみり弁」というのが小西真奈美主演で映画賞も取りました。もう1つ、映像による情報発信として「TOKYO DOWNTOWN COOL」をご覧ください。ユーチューブで「TOKYO DOWNTOWN COOL」と入力していただくと、江戸切子や伝統工芸など、墨田のキーワードをもう1つ入れていただくとたくさん出てきます。墨田の産業にかかわる方、観光にかかわる方、人に着目した映像発信をしています。こうした良質は映像によるイメージ発信も重要な事業です。

あとは、アートを生かした観光ということで、芸大と台東区と連携で、GTSのアート観光プロジェクトなども進めているところです。NPO向島学会の「墨東まち見世」。4年目になりますが、小さなスペースを使って、向島のエリアでアーティストたちが1カ月とか2カ月間、一斉にやります。街全体で20カ所に散らばってそういうプロジェクトが動いているという感じになります。向島にアートが根づいていくような予感がします。そういった取り組みも進められているところです。

広域連携は、舟運のところで触れましたが、もう1つは、江東6区、墨田、台東、足立、葛飾、江戸川、江東の6区で「おさんぽ案内帖」というガイドブックをつくりました。それぞれの区の街歩きの案内や、七福神などもそれぞれの区でやっている七福神のルートを2ページにまとめたり、お祭りなど共通のものは共通のもので紹介しながら、各区の街歩

きを紹介するガイドブックです。広域連携は取組まなければならない課題です。

以上が現在の事業展開です。最後に、来年に向けた両国の話をしておきます。

(図 33)

先ほど浅草が、毎年毎年ルーティンで定着したイベントを回していながら、2年後、3年後を考えているというお話をしましたが、我々もそういうことでなければいけないなということで、タワーの開業1周年をにらんで考えているものがあります。

(図 34)

これは江戸名所図絵ですが、両国橋を渡ると真正面に回向院がありました。

(図 35)

これは回向院のご開帳の絵です。仏様を見せて、参拝客がお賽銭なり飲食などでお金を落としていく。こんなに人が来たわけですから、両国橋三千両と言われていました。1日三千両のお金が動いていたと言われるぐらいです。そうなると、全国のお寺が仏様をかついである期間ここへ来るわけです。もちろん幕府の許可が要ります。お賽銭を持ち帰って、お寺の屋根を直す、本堂を直す、そういうふうにしていました。これを出開帳と呼んでおります。記録に残っているところでは、回向院で166回行われました。この出開帳を来年やる話があります。

(図 36)

長野善光寺は7年ごとに居開帳（ご開帳）をやっています。2009年だったと思いますが、600万人ぐらいの人を呼んでいるということで、来年長野善光寺の出開帳仏を持ってきてやるということです。

来年に向けた回向院の仕掛けをもうひとつお話します。ここは江戸の六大浮世絵師の鳥居清長の菩提寺で、墓碑がありました。今はなくなっているので、来年199回忌を機に墓碑の復活をしようという動きがあります。墓碑の中に鳥居清長の八頭身美人の絵が彫られますが、女の子が生まれたらここへお参りに来て、この碑をさわると美人になるとか、モデルになる女性がデビューの前はお参りに来るとか、そういう都市伝説をつくろうという話が動いています。

(図 37)

最後のまとめになります。これからの墨田区を成功させていくには、墨田をいかにブランディングしていくかだと思います。観光もブランディングですが、ものづくりも同じで

す。「すみだ地域ブランド戦略」というパンフレットの12、13ページをご覧ください。地域ブランドというのは、江戸から明治、現代につながるDNAを継いでいくということ。そして、地域の文化を次の世代につなげていくということ。ものづくりを通して生活に潤い、彩りを与える。そういったテーマの製品に合致するものを認証しているわけです。認証とは別に、コラボレーターさんたちと区内の企業が結びついて製品づくりをしております。これも認証商品になるものです。

これを見ていただくと、左上に名児耶秀美さんの商品があります。名児耶さんの商品の右上に「てのひらサラダトング」と書いてあります。これは笠原スプリングさんという区内の小零細事業所で、笠原さんと名児耶さんがコラボレーションした製品です。セレクトショップで売れ始めているという話を聞いています。つまり、物をつくる技術だけではだめで、いかに消費者につながるか、近づいていくかということです。今まで受注生産で、言われてきたものをつくっていた事業者さんが、消費者にどうやって近づいたらいいというのが課題です。デザイナーやバイヤーがコラボレーターとなって区内の企業とつながって物ができる。それをバイヤーであれば自分の売り場を持っていますので、そこで売ってもらうことにつなげていくという動きをしているのが地域ブランド戦略です。

これは行政が税金を使ってやっていますが、行政とは別に独自の動きが始まっています。右の上の山田遊さんという方は、区内の企業をグループ化して、企業とコラボして商品をつくっています。

そういう動きが始まっているのはなぜだろうと私は思っていますが、1つは、先ほど申し上げた、タワーに注目が集まり、東京の都市軸が東に移ってきて、みんなの見る目が東を無視できなくなってきた。墨田という街に、「ここは結構職人がいるよね」というイメージで企業に声をかけてみたら、「意外といい物ができるじゃないか。やっぱり江戸の雰囲気があるね」という発見があると思います。そういうことから生まれてきているのがコラボレーション商品です。それが新しい動きになってきているというのが1つです。

(図 38)

画面をご覧ください。ソニーエリクソンという携帯をつくっている会社が下町の職人さんとコラボレーションをしております。ソニーエリクソン社が「墨田区って、江戸からの職人がいるっていうけど、どうなの、何かつくってみたいね」という話で始まったのが、江戸切子による携帯のホルダーです。

この塩澤政子さんというのは、お神輿とかお寺の扉に金具がついていますが、そういう仏具的なものをやっている方です。その技術が彫金を使った携帯ホルダーになる。

(図 39)

(図 40)

(図 41)

楓岡武之さんもそうです。

(図 42)

つまり、これからのものづくりですが、タワー効果や外部からの注目でコラボレーターのような担い手が出てきて、区内の企業と結びついてくる。それで消費者の評価が得られれば、物として売れてくるわけです。消費者にどんどん近づいていく。その商品を見ると、伝統が感じられる、においがするような商品は結構あります。そういうものを再構築していくことがものづくりの上での方向性だと思っています。

それでは、観光はどうかというと、今申し上げたとおり、江戸から明治、昭和の伝統文化を掘り起こしていこうということですので、そういう歴史に根差した観光をつくっていきます。向島学会にしても、在原業平に源を発する観光だと思います。観光の向こう側に江戸下町文化みたいなものが透かし見えてくるというのが1つあります。墨田といえばそういうものなんだ、あんな新しいスカイツリーの周りにそういう街があるんだということが定着して、そういうメッセージが発信できると、これこそブランディングになってくるのではないかと考えています。こうしたイメージを介してものづくりと観光が結びついていくというのが融合の姿ではないかなと思います。

それには人であったり、街の風土であったり、ものづくりのDNAがきちっとそこにあることが大切です。これらの根底にあるものづくりと産業との融合が、これからの姿ではないかというのが今時点での私の結論です。これはまだタワーが開業していないのに、結論めいた話をするのは時期尚早ですが、今日お話をさせていただいた観光、そして今動きつつあるものづくりが、タワーの開業を機に、5年、10年かかるとは思います。墨田の街のイメージを大きく変えていくと思います。そういうことに向けて我々も働いていきますし、街の人とタグを組んでやっていきたいというのが今時点での私の想いです。

この後はご質問を受けたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

フリーディスカッション

谷 先生、大変貴重なお話ありがとうございました。また、今日はたくさん資料をいただきまして、ありがとうございました。

皆様、この機会にご質問がおありの方はお手をお挙げください。

猪狩（株イカリ設計） 高野先生、ありがとうございました。私、隅田川市民交流実行委員会を25年やっております。先だつての11月23日のシンポジウムで陣内先生を初め、産業観光部長の栗田さんなどのお話がありました。

今先生がお話しになったように、墨田と台東、墨田と江東、隅田川を挟んで中央とかあるんですが、一番大事なのは、職人の墨田と商人の台東ですね。私はずっと水のまちづくりをしておりましたが、北十間川の真横にこれができると、ほとんど一体になる。その場合に、扇橋水門を通じて、横十間川、小名木川、隅田川と非常にロングランな和船の振興で、ベネチアのゴンドラのようなイメージがあります。

大量の人を運ぶには、枕橋水門、源森橋、小梅橋とございますが、そこが今ネックになっています。そこを扇橋閘門のように閘門化して、船が直接スカイツリーから隅田川に行き来できるというのに、8億円から10億円かかると聞いております。東京都からお金がなかなか出ない。でも、尖閣諸島を買えるぐらいのお金が東京都はあるんだから、私はまず足元から資金を出してもらいたいと思います。それがいつ頃実現になるか。横十間川に船着場をおつくりになるとかいろいろ構想がおありのようですが、江東と結ぶには、小梅橋閘門と、今秋に中川大橋のところの船番所前に川の駅ができる。水陸両用バスが日の丸自動車をつくって、昨年11月にニュースで話題になりました。水陸両用バスや和船などいろんな船が行き来します。船着場がスカイツリーの真下にできました。そこは10メートルか、11メートルで非常に川幅が狭いんですけども、少なくとも小船は横十間川を通じて小名木川に至る。旧中川にも入ることができる。そうすると、船番所前の川の駅とのつながりが今後どういうふうに進展していくか。その2点をお伺いしたいと思います。

高野 まず1つは、隅田川の吾妻橋から入ってタワーの前までは直接に行けません。というのは、小梅の樋門は閉ざされていて通れないようになっています。これが通れるようになればタワーまで直接行ける。タワーを回って、グルッと回遊性ができます。ここから

ディズニーランドまで行けるという話があって、東京都が管理している小梅の樋門を閘門にしてもらいたいというお願いをしています。ただ、数十億円とか、結構お金がかかるし、その後の維持費がかかるので、これについては東京都があまり前向きでないなかで、区長が都知事に要請文を出しました。それで、お互いに研究会を開こうということで進めています。ただし、実現については時間がかかる感じです。

番所橋のところは、江東区が水陸両用バスを導入します。江東区としっかりと連携をして、例えば内河川の運航も、江東区と運航の研究会を開いて共同でやっております。内河川の船事業をやるのに、民間の事業者に入ってもらいますが、大もとの計画を江東区としっかりと連携してやってまいりますので、ここも1つの延長線上の話になるのかなと思っております。

井熊（相模原市東京事務所） 今日都市のプランニングや観光の4つの柱など、非常に勉強になりまして、ありがとうございました。

私が気になったのは、向島あたりは路地が1つの売りになっているという中で、今度は防災の観点でそういったものを整備しなければいけない、街の景観を壊してしまうようなことが今後出てくる。そういった部分で保全とどう両立を図っていくのかという点です。

それと、高札を手続が面倒くさいだから民有地に立てるという話ですが、逆にそういったことで公共の中で反対意見もあったのではないかと思います。そういった部分をどういった形でネゴシエーションを図ったか、それだけお聞かせ願いたいと思います。

高野 向島の路地の話は、おっしゃるとおりで、防災上の問題も出てくるわけです。そういうことで、防災的な手当てをしていくところはどんどん魅力がなくなってしまいます。残念ですが、行政がいろいろな制度を使ってきれいにしていくと、今までの魅力がなくなっていく。ある程度、そういう流れはとめられないですが、担い手であったり、地元の人たちがそれを活用しようという動きが一方で起こってきていますので、その辺はしっかりと支えていって、例えば直すにしても、新しくはなるんだけど、懐かしいという直し方がある。新しくなって、六本木と同じビルが建ってしまったら全然意味がなくて、新しくなるけど低層で懐かしさが残っていく雰囲気のものにするとか、その辺の知恵は出していないといけないのかなと思っています。

高札の話は、役所内部も大変ですが地元の方とのネゴシエーションみたいなものは結構大変です。大変ですが、これをやるのが、両国の場合、同じ地元の人だったりするわけで

す。町会の方が我々と一緒に動いて地元を回っていく。もちろん断られたところもありますけれども、こういう話があります。マンション建設現場に囲われた壁がありますが、あの壁に2本高札を立てたところ、マンションができ上がって、壁が、我々の気がつかない間になくなっていました。高札を探したら、1本はその近くにありましたが、もう1本が見つからない。どうしようと思って探したところ、何軒か先の飲み屋さんが自分のところに高札を立てた。要するに、これはカッコいいから店の前に勝手に立ててしまった。それなら、お願いしますということでマンションからそこに高札が移ってしまったという例もあります。そういったことを繰り返しながら両国の高札は実現したのです。

川部（プランナー） 今お話をお伺いしてしまして、スカイツリーが完成すると、来街者が2500万人。経済的な意味での産業振興効果というのは非常に大きなものが見込まれると思いますが、一方で3Mの墨田区の地場産業の産業規模は非常に零細で小規模です。区が一生懸命マイスターで応援しても、零細小規模の範囲の中だったからついてきたけれども、いきなり2500万人の来街者にこたえるための規模とスピードというものに地場の産業振興を支える零細な産業者たちが対応できるかどうか。

かつて梅鉢屋さんが江戸時代から続いている砂糖菓子を何とかもっと売りたいということで、紹介して伊勢丹の地下に出店したことがありましたが、出店できてよかったねと言っていたら、10日でもうギブアップ。こんなに売れたら生産が追いつかないから勘弁してほしい、そんな話がありました。そういう種類のミスマッチがすぐ起きてくるのではないかという心配をしています。これは高野さんの産業観光部長という大きい規模の来街者を意図する政策と、今までのマイスター等に見られる零細な中小企業の規模の産業とそのミスマッチをどうしていられるおつもりなのかが、今お伺いしていて気になったんですが、どうでしょうか。

高野 確かに非常に大きい課題だと思います。もともと事業所の減少が非常に激しい。その激しい中身を見ると、1人、2人の零細の事業所がどんどん減っているのです。平均の事業所規模は大きくなっているんです。川部先生がおっしゃったようなことはこれから直面して、我々今すぐに答えは出てこなくて、苦慮することになると思います。今、新しい動きの中で、3Mを今までどおりの3Mに加えて新しい風を入れていこうということで、今年、アウトオブキッザニアを始めることになりました。それに手を挙げてくる方々がいて、もちろん零細な企業の方々ですが、3Mのメンバー以外からもやりたいという人が出

てきている。それが若い人だったりする。新しい担い手の人たちも入ってくるので、そういう中でどういうふうにマッチングしていくのかなというのは今考えているところです。明確な答えにはなりませんけれども、確かにそうですね。

川部（プランナー） 今、商工会議所という組織も、商業も工業も右肩下がりで、組織自体が維持できないくらい途方に暮れています。私がおつき合いです庄内地方は、農業を基盤とした地域ですから、農業を基盤とした地域の商業と工業がどうあるべきかということで、農業まで組み込んだ商工会議所の経営戦略というのが少し見えてきて、その方向かなと思っています。逆に、産業経済部ではなくて、産業観光部の観光という新しい概念が、もしかしたら墨田の新しい時代を開くのかもかもしれませんね。

高野 そういう点では、かつて工業振興マスタープランというのを5年置きにつくってしました。今回見直しですが、工業振興ではなくて、産業振興マスタープランになりました。それは製造業から商業、サービス業も含めた、トータルな意味での観光的な要素も含めた産業振興マスタープランだろうと今思っています。今年度中にまとめて次の施策の方向性を出していきます。

川部（プランナー） そういう意味では、モデルショップも観光的な要素でマップをつくったりしていますから。

高野先生 おっしゃるとおりで、川部先生とは3Mにかかわっていただいた二十数年前の私の平職員だったころのおつき合いです。あの頃、観光の意識はなかったですね。ところが、この3Mで、新しい店が増えると、テレビの「ぶらり途中下車の旅」にはよく出る。それでこれは観光的な要素だなということで、観光を始めるときに3Mと神社仏閣を回って、嚙家さんにガイドしてもらおうという試みをやったことがあります。そういった意味で新しい光が3Mに当たってきたなという感じですね。

谷 そろそろお時間になりました。私が一言先生にお伺いしたいんですが、これから皆さん、東京スカイツリーにいらっしゃると思いますが、交通のことでは自動車は大変なことになりますね。ぜひ電車を使っていただいて、街歩きを楽しみながら。

高野 すみまるくんに乗っていただきたい。押上乗りかえはただですから、100円で南から北まで行けますので、すみまるくんに乗ってください。

谷 皆さん、ぜひすみまるくんをご利用ください。先生のお話にもありましたけれども、今日はライティングの調整がございます。19時から21時ぐらいまで。

高野 今日は1995本のLEDですから、かなり光が明るいでしょう。本設の光の実験に近いと思います。

谷 現場に行くと、かえって込みますので、皆さん、お近くから見えるところがございましたら、ぜひご覧くださいませ。

今日は先生、貴重なお話大変ありがとうございました。(拍手)

以上をもちまして本日のフォーラムを終了させていただきます。ありがとうございました。

(了)



高野 祐次 氏